

8/31
五夜

今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

IV
②



NPO法人西淀川子どもセンター代表
西川日奈子さん

昨今の小学校の卒業式で袴(はかま)などが流行し、「お金がかかる」と困っている親がいます。小学校入学時に、10万円ランドセルを買い与える家庭。学校に通う中で購入しなければならぬものはたくさんあって、それがどんどん商売のターゲットにされていく。そういう仕組みは、おかしいように思いま

体を心も喜ぶ時間を

す。

西淀川子どもセンターでは「いっしょにごはん!食ベナイト?」という夜間支援や、絵本の読み聞かせなどをしています。居場所の提供は非常に大事で、誰がきてもいい場所、時間、内容を考え、日頃の活動や行事を組み立てます。消費中心で過ごす余暇ではなく、自然の中で仲間とありのままの自分でいられるような余暇の支援も。

見えにくい背景

いろいろな子どもがいて、見えにくい背景を抱えながら、若者ボランティアたちと一緒に時間を過ごし、お互いに少しずつわかりあっていきます。出会いから何年もかかって、ようやく心を開いてくれるようになった男の子が18歳とな

り、スタッフの立場です。とかかわってくれていま

虐待環境の中で育った子どもたちは、殴られたり、暴言をあびたり、ほっておかれたりする中で、認知のゆがみが生じることが多く、金銭感覚や対人感覚が身につくにくいまま、現実社会に対して孤立してしまっています。子どもの体も心も喜ぶような時間を重ねること、そんな「ずれ」の修正が少しでもできればと思います。その子のよさや、気持ちかわかること、「うれしそうやったなあ」というような共有の言葉かけ。その場所に待っていてくれる人がいて、喜んでくれる人がいて、対等な関係の中で自分をつかみ直していくことが必要です。

学習支援も食事支援も

「もぐらたたき」のようなもので、関わるほど次々に課題が見えてくる。肝心の子ども本人の困難は、簡単に解決しません。そもそも、「学校の時間だけでは足りないから塾に行かせるべし」という通念に納得できません。教育の本質、家庭の役割、子どもを何を大事にし、なぜ学ぶのが問われていると思えます。

安心できる場に

「将来のために」ばかりでなく、子ども時代を、自然や人のかかわりのなかで過ごすことが大事です。人生の想像力の多くは、子ども時代の体験によって培われるからです。子どもには「いっしょに幸せになりたい」と願う力があります。どこかで線を

引く「ぶつ切りの支援」から、「つながりの支援」へと、おとながその気になることです。

まず学校という場が子どもたちにとって、心から安心できる場になるように努力すべきです。「ここは自分が自分でいられる」と子どもたちが思えるには、学校の中で「自分も他人もきちんと尊重される心地よい体験」が必要です。

国や自治体にしかできない「仕組み作り」は、ばらまきではなく、学校教育のすべての費用を無償にすること、塾がなくても学力が身につくことの二つです。北欧では当たり前ですが、この二つは学ぶ権利をすべての子どもに保障するための前提です。